岡先生の論文指導と結実

上村健二

私は京大文学部三回生の時に西洋古典学科に分属して以来、一貫して岡道男先生のご指導を受けた。先生の授業は、どのような形式・領域であれ、きわめて貴重な内容を持っていたに違いないが、学生にとっては、ふだんからよほど熱心に取り組んでいる分野でなければ、その真価まではとうてい理解できるものではない。私にとっては、ウェルギリウス『アエネイス』の授業が最も有益であった。博士課程の二年目に、『アエネイス』研究の授業があった。私は以前からこの作品を研究対象にしていたため、いつも授業の日をを楽しみにしていた。今にして思えば、毎回ずいぶんと無遠慮に質問をぶつけていたものだが、その度に岡先生はていねいに答えて下さった。ある時、第二巻と第九巻のあるエピソードの共通性に話が及んだ。その内容には、私が前年に提出した研究報告の一部と共通する点があった。先生は、前年度は外遊中で、私の研究報告の内容についてはご存じなかったのだが、たまたま私の考えと一致する事柄を授業中に述べられたわけである。

その日の授業の終わりに、私はその研究報告の件を切り出した。先生は本当に興味を持った様子で（決して学生に対する単なるサービスという感じではなく）、私の話に耳を傾けていた。そして、翌週（翌翌週だったかもしれない）、前年に提出してあった例のレポートが私に返却された。それには、びっしりと先生の手による書き込みがあった。先生は、私のレポートを精読した上、実に詳細に批評・助言を加えて下さったのである。

先生のご尽力に私は感激した。わざわざ私のために時間と労力を割いていただいたということもあるが、もっとうれしかったのはその内容である。先生の書き込みの重点は、誤りを指摘・批判することより、「こうすればよいのではないか」という建設的な示唆・提案にあった。このことは、先生が私の考えに大筋で同意しているということも意味していたのである。私は内心大いに励まされ、この研究報告に様々な修正を加えて、博士課程在籍中に論文として発表した。もし岡先生のご指導がなかったら、これは永久に日の目を見なかったかもしれない（研究報告については、先生に読んでいただくまではあまり自信が

なかったのである）。以上の例に限らず、岡先生の教えは――有名な大著からノートの片隅の書き込みに至るまで――我々弟子たちの貴重な財産となっている。我々はもはや先生の新しい著作を読むことはできないのであるが、かつての先生のご指導は我々教え子たちに受け継がれて、今後も結実していくに違いない。